

書評

横田陽子 著

『技術からみた日本衛生行政史』

永年滋賀県において公衆衛生行政の試験検査機関に勤務後、立命館大学大学院先端総合学術研究科に学ばれた横田陽子氏が執筆された『技術からみた日本衛生行政史』を紹介します。本書は序章・衛生の科学技術、第1章・化学分析の導入、第2章・細菌学の制度化、第3章・衛生行政における新たな展開、第4章・公衆衛生の「専門職」化、第5章・地方衛生研究所の誕生、終章・科学と社会が交錯する現場としての衛生行政、からなる。衛生行政史が医学史・医療史の中に占める領域は大きいものであるが、衛生技術者の眼から研究し論じたものではなく、横田氏の成果を大なるものと考えます。それぞれの章において教唆と興味深い記述が多数あります。その中のいくつかを紹介して書評者としての責を果たし、(注)として挙げられている豊富な参考文献資料がこれからの医学史研究にひろくもちいられることを期待します。

序章では衛生・公衆衛生における科学技術の重要性とその領域の史の変遷を述べている。特に地方自治体の「衛生費」が1997年まで増加していたが2006年にはその82%まで減少していることを指摘、公衆衛生試験検査部門の弱体化を危惧、そのことが社会的な議論の俎上に上がらないことの問題意識が本研究にとりかかった理由と読める。

第1章は1855年設置された長崎海軍伝習所における近代西洋科学技術教育に始まる日本の近代化は混乱を伴うものであり、毒薬農薬などの取り締まりを目的に「司薬場」が1872年設置されたことから筆を起こしている。1875年以降、衛生行政は文部省から内務省(衛生局)に移され、警察行政として発展したこと、分析化学を学んだ薬剤師が「衛生技師」として活躍の場を得たことを述べている。その衛生行政が「法律が主、科学技術が従」となってゆく背景を記している。この現

在に続くながれが日本の近代化のはじめに出来たことは興味深い。

第2章はドイツ医学を日本の範とした明治の日本の医学教育が多くの留学生・研究者を細菌学研究の先進国ドイツに送ったことにより、その医学技術を日本に導入することができ、北里柴三郎による伝染病研究所の開設など衛生行政に占める細菌学領域が拡大したことを論じている。この過程はその後に古い世代の医師の大日本医会と大学関係者による医師会法案反対同盟の対立や、伝染病研究所の大学移管などテクノクラートとアカデミズムの対立を論じており、興味深い問題である。この歴史については多くの議論があるが、衛生技術史からの新しい視点と考える。

第3章は「栄養」の制度化を論じている。検査・防疫行政からの新しい展開として、科学技術の社会政策へ寄与すべきものとして「栄養」の問題を特に取り上げている。生活の科学化として1915年佐伯矩が世界で始めて開設した私立栄養研究所がその後に内務省栄養研究所となり現在に至る経緯が述べられている。同時に本章では都市と植民地の衛生試験所についても述べており生活の科学化が戦時体制にとりこまれていく過程の検証をしている。この研究領域は日本現代史、特に科学史研究の新たな領域であろうと考える。

第4章では法律を規範とする法科と治療医学に傾斜を強める医科の間において、規範を予防医学とする公衆衛生「専門職」として日本の衛生技術官が第一次世界大戦後の国際連盟保健機関を中心とする国際的な連携の中に参加してゆく過程を述べている。1925年国際連盟主催衛生技術者交換会議が日本で開かれたが、その会議において日本の研究所を中心とした公衆衛生関係研究のレベルの高さと比べて、社会の実施応用における実現が疑問視されたことが報告されている。この時代の

衛生技術官の行政官としてのジレンマは、その後の厚生省の設置等において、政治が衛生技術を公衆衛生としてどのように評価してきたのかを含めて、これからの研究課題であろう。

第5章では戦後の占領下における衛生行政を記している。GHQ/SCAP/PHWは科学的・客観的・合理的な行政を指導したが、この専門性の重視(科学主義)は衛生技術官の求めてきたものに合致するものであり、戦後の衛生行政の再建は現場においては好意をもって迎えられたと考えられる。地方衛生研究所設置要綱が1948年につくられるなど、戦後の混乱期に衛生行政の重責は大きかったと考えられる。しかしこのプロジェクトは完成したとは言えずに、その後の世界の政治と日本の復興の中で次々と起こってくる、新たに必要とされる衛生科学技術に後追いの対応を余儀なくされてゆくことも述べている。

終章では本書の要約として日本の衛生行政における試験検査部門の歴史を「明治のモデル移植期」「大正からの展開期」「戦時変容期」「戦後改編期」に分けたとしている。

法と現実の間にあり、大学の学術的研究と行政の実務的研究の間にある技術者の問題提起はどの領域においても重要で意味のあることが多い。しかし衛生行政において、そのような問題提起は放置されていることも多い。本書はその現場を経験された著者がそのような構造に対して日本衛生行政史を検証することにより一石を投じたものと考ええる。読者の立場からは本書の、章立てが細分化されてテーマごとに分けられることと、技術者と技術官の問題の議論が今後深まることを期待します。

政治・社会だけでなく自然現象でも想定できないことのおこりうる現代に、衛生技術(者)はどのように対応してゆけばよいのか、歴史学のみならず未来学に携わる方にも読んでいただきたい研究書として紹介します。

(渡部 幹夫)

[晃洋書房, 〒615-0026 京都府京都市右京区西院北矢掛町7番地, TEL. 075 (312) 0788, 2011年3月, A5判, 231頁, 3,400円+税]

青木歳幸 編

『小城の医学と地域医療——病をいやす——』

本書は2011年10月15日から11月27日にわたって小城市立歴史資料館において開催された特別展の図録で、図録編、パネル編、論考編、史料編の4編からなる。図録とはいえ前2編をあわせても約4分の1を占めるにすぎず、大部分は史料編であり、そのうちでも馬郡元孝の「東征日記」が50ページ余りを占めている。その意味では特異な図録といえよう。

佐賀大学地域学歴史文化研究センターと小城市教育委員会は、2006年以降、地域に密着した特別展を開催して地域の文化発展に寄与してきた。2011年の展示会は本学会代議員でもある同センター青木歳幸教授がプロジェクト代表としてまとめ役となり、史料解説にも腕をふるっている。「は

じめに」によれば、この展示会は江戸時代の庶民医療の実態や、医師による投薬と治療の広がり、漢方医学から西洋医学への転換と近代医学の発達、地域医療の展開の姿を描くことを目的としている。

あくまでも地域に根ざした医療の在り方に主眼のおいているので、図録編には佐賀大学附属図書館小城鍋島文庫所蔵の「元茂公御年譜」や「藩医松隈氏江戸出仕記事」、佐賀県立図書館寄託の「明暦二年御直印之着到」などがある一方、全国的に知名度の高い『本草綱目』や『和漢三才図会』もとりあげて「1 漢方医学の展開」をしめしている。「西洋医学の導入」ではわれわれに馴染み深い『解体新書』や各務文献の『整骨新書』とともに、高